

ウンカ類幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病の保毒虫率について

昨年11月下旬に調査したウンカ類越冬世代幼虫の生息密度は、全県平均で平年比622%(10㎡あたり本年62.2頭、平年10.0頭)と高く、越冬量は多い見込みです。

同時にヒメトビウンカ幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫検定を実施した結果、栃木市の1地点で保毒虫率が要防除水準の10%を超えましたが、その他の地点は要防除水準未満でした(表1・図1)。

越冬前の保毒虫率が要防除水準を超えた地域で縞葉枯病罹病性品種(コシヒカリ、なすひかり等)を作付する場合は、防除対策が必要です。その他の地域でも、ウンカ類幼虫の密度が高く昨年縞葉枯病の発生が見られた地域では、密度を下げるため防除対策を行いましょう。

表1 ウンカ類越冬世代幼虫の生息密度とイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率

調査地点	生息密度	検定虫数	保毒虫率(%)		
			H22	H21	H20
大田原市戸野内	57	124	0.0	0.0	0.0
大田原市蛭畑	78	124	0.0		
那須烏山市滝田	57	124	0.8	0.0	0.0
矢板市矢板				0.0	0.0
さくら市蒲須坂	30	124	0.0	0.0	0.0
高根沢町花岡	3	124	0.0	2.6	-
芳賀町祖母井	6	65	0.0	0.0	0.0
真岡市粕田				5.6	-
真岡市青田	0	124	4.0	0.0	-
宇都宮市横山町	0	106	0.0	2.2	0.0
日光市小林	0	103	0.0		
鹿沼市酒野谷	24	120	1.7	4.0	1.4
小山市小薬	9			4.0	7.2
小山市下国府塚				14.0	18.0
小山市石ノ上	84	124	3.2	11.0	2.5
壬生町助谷	24	124	0.8	2.0	3.0
栃木市惣社町	153	124	3.2	0.0	8.7
栃木市大平町真弓	12	119	21.8		
栃木市藤岡町富吉	558	124	2.4	8.0	3.3
佐野市堀米町	24	124	0.0	1.0	0.0
足利市上洪垂町	0	88	0.0	1.0	0.0
平均値	62.2		2.3	3.1	2.9
平年値	10.0				



国土地理院承認平14総複第149号

保毒虫率(%)	0	0.1~0.9	1~4.9	5~9.9	10以上
記号		x			

図1 イネ縞葉枯病保毒虫の発生状況

生息密度：背負型動力機を使用した吹出し法で0.3m×11mのウンカ類幼虫を採集し、10㎡当り頭数に換算した。

保毒虫率：11月下旬に予察ほまたは周辺水田の再生稲または畦畔雑草から採集したヒメトビウンカ幼虫をエライザ法により検定した。：検定頭数10頭未満 空欄はデータなし。

イネ縞葉枯病の要防除水準：越冬世代幼虫の保毒虫率が10%以下の地域では防除の必要はない。

【防除対策】

ヒメトビウンカは畦畔等の雑草で越冬するため、ほ場周辺の除草等により越冬場所をなくす。耕起していないほ場は速やかに耕起を行う。

縞葉枯病抵抗性品種「あさひの夢」の作付割合を増やす。

罹病性品種(コシヒカリ、なすひかり等)を作付する場合は、ダントツ箱粒剤、アトマイヤー箱粒剤またはこれらを含む混合箱施用剤を使用する。

プリンス粒剤は、ヒメトビウンカの感受性が低下している地域があるため、罹病性品種への使用を避ける。

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

当センター携帯サイト(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

麦類赤かび病は適期に防除しましょう！

今年の麦類の生育は3月の低温によりやや遅れています。4月1日付の気象予報によると向こう1か月の気温は平年並ですが第1週は低いと予想されているため、11月上旬播種の二条大麦の出穂期は4月第4半旬～5半旬頃と見込まれます。

麦類赤かび病は開花期～乳熟期が感染適期で、開花期以降に曇雨天が続く場合には発生が助長されます。赤かび病が発生した麦は商品価値がなくなるので、麦類の生育をよく観察し防除適期を逃さず防除しましょう。

(参考) 農業試験場(宇都宮市)での出穂期予測(平成23年3月28日現在)

麦種	播種日	今後の気象経過による出穂予測日			(参考) 茎立期
		平年並	平年+2	平年-1	
スカイゴールデン(二条大麦)	11/10	4/20	4/15	4/24	3/20
サチホゴールデン(二条大麦)					3/20
シュンライ(六条大麦)	11/4	4/20	4/14	4/25	3/26
農林61号(小麦)	11/5	4/30	4/23	5/4	3/19

防除対策

- ・麦類の生育状況を良く観察し、適期を逃さない防除が重要。
 - ・六条大麦や小麦は2回防除が基本。
- (薬剤耐性菌の発生を予防するため異なるグループの薬剤を使用する。収穫前日数や1回目の使用農薬に留意して薬剤を選定する)

表1 麦種ごとの防除適期

麦種	防除適期	多発のおそれがある場合 (不稔粒発生や登熟期連続降雨など)
二条大麦	穂揃期7～10日後	1回目の7～10日後に2回目散布
六条大麦	開花始めと1回目の10日後の2回散布	3回目散布
小麦	開花始めと1回目の10～20日後の2回散布	3回目散布

開花始め：抽出した葯殻を初めて認めた日

表2 麦類赤かび病に登録のある主な薬剤(平成23年4月1日現在)

グループ名	薬剤名	作物名	希釈倍数 (使用液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数
ハッパイミダゾール系	トップジンM水和剤	麦類 (小麦を除く)	1,000～1,500倍	30日前まで/3回以内*1
		小麦	1,000～1,500倍	14日前まで/3回以内*2
DMI剤 (EBI剤)	シルバキュアフロアブル	大麦	2,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/2回以内
		小麦	2,000倍 (60～150L/10a)	7日前まで/2回以内

注) *1：出穂期以降は1回以内 *2：出穂期以降は2回以内

表2 麦類赤かび病に登録のある主な薬剤（平成23年4月1日現在）

グループ名	薬剤名	作物名	希釈倍数 (使用液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数
DMI剤 (EBI剤)	チルト乳剤25	小麦	1,000～2,000倍 (60～150L/10a)	3日前まで/3回以内
	ワークアップフロアブル	小麦	2,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/2回以内
QoI剤 (ストロピ ルリン系)	ストロビーフロアブル	麦類 (小麦を除く)	2,000～3,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内

<無人ヘリコプターによる散布の登録がある主な薬剤>（平成23年4月1日現在）

グループ名	薬剤名	作物名	希釈倍数 (使用液量)	収穫前日数/ 本剤の使用回数
ヘンゾイミダ ザール系	トップジンMゾル	麦類 (小麦を除く)	8倍 (0.8L/10a)	21日前まで/3回以内*1
		小麦	8倍 (0.8L/10a)	14日前まで/3回以内*2
DMI剤 (EBI剤)	シルバキュアフロアブル	大麦	16倍 (0.8L/10a)	14日前まで/2回以内
		小麦	16倍 (0.8L/10a)	7日前まで/2回以内
	チルト乳剤25	小麦	8倍 (800mL/10a)	7日前まで/3回以内

注) *1：出穂期以降は1回以内 *2：出穂期以降は2回以内

詳しくは、農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問合せ下さい。
また当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用ください。

(0 2 8 - 6 2 6 - 3 0 8 6)

なしのナシヒメシクイの発生に注意しましょう！

本年はナシヒメシクイ越冬後成虫の発生量が多く、地域によっては例年より早い時期からフェロモントラップに多くの成虫が誘殺されました。那須烏山市の調査地点における誘殺数は、過去5年間で最も多くなっています（図1）。

越冬後成虫は、なしだけでなくサクラやウメなどバラ科樹木の主に新梢に産卵し、そこから発生する幼虫が芯折れを引き起こします。

当センターの5月の巡回調査では、一部のなし圃場で芯折れが散見されました（写真1）。新梢に寄生した幼虫は6月中旬頃から羽化して本年第1世代の成虫となり、なし圃場に飛来して果実に加害するおそれがあります。果実に産卵された卵からは6月下旬頃に第2世代の幼虫が孵化し、主になしの果頂部から食入し、果実の表面の穴から糞を排出します。こうして加害された果実は商品価値を失います。

防除対策

- ・ 幼虫に対する防除適期は、成虫発生ピーク到達後7～9日である。当センターにて発表するフェロモントラップ誘殺結果に注意し、適期防除に努める。
- ・ 園内をよく観察し、果実や新梢に食害が見られた場合、速やかに摘果・せん除し水漬け後に土中に埋設する。
- ・ 発生・食害状況を確認し、必要に応じてノーマルト乳剤（1000～2000倍・総使用回数2回以内・収穫前日まで）、サムコフロアブル10（5000倍・総使用回数3回以内・収穫3日前まで）などで適宜防除を行う。

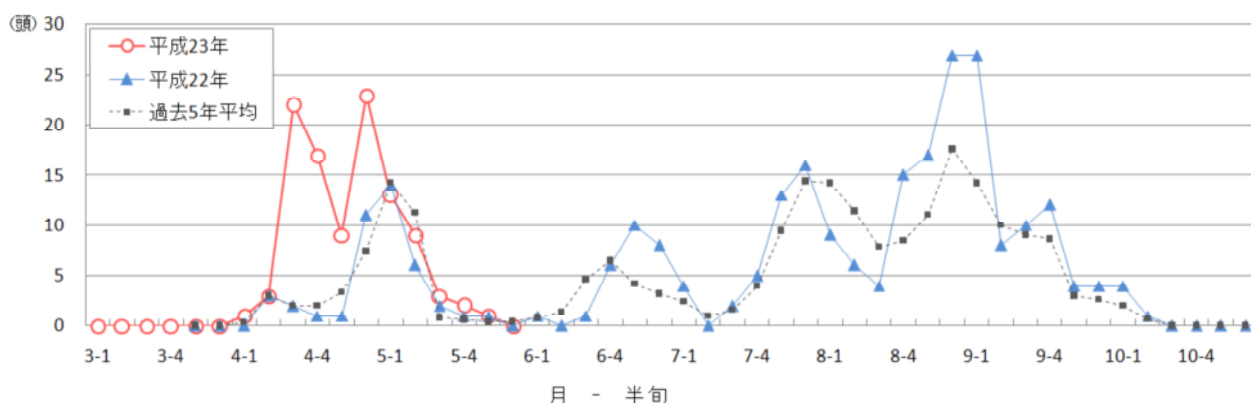


図. 那須烏山市におけるナシヒメシクイの発生消長

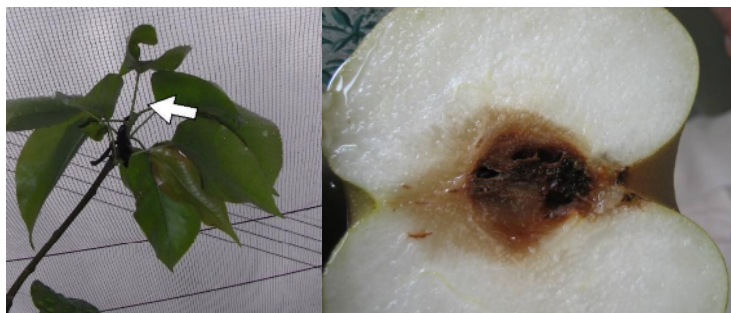


写真. 芯折れの被害（左）と果実の食害（右）

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

また、当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。

（ 0 2 8 - 6 2 6 - 3 0 8 6 ）

早い梅雨入りでコムギ赤かび病の増加が懸念されます！

5月第5半旬の赤かび病調査で、県南部の小麦ほ場の一部に赤かび病の発生を確認しました（写真）。その後、県中部の小麦でも赤かび病の発生が散見されています。

5月27日に平年より12日早く梅雨入りし、同日発表の1か月予報では、今後、降水量は平年並～多く、日照時間も平年並～少ない見込みです。

今年の麦類の出穂は平年より4日～6日遅く、登熟も遅れています。登熟期に曇雨天が続くと赤かび病の発生が助長されることから、今後小麦ほ場で赤かび病の増加が懸念されます。追加防除により赤かび病の増加を抑えましょう。



写真 赤かび病が発生した小麦

防除のポイント

- ・開花期防除で使用した薬剤と同系統の薬剤は避け、収穫前日数に留意して薬剤を選定する。
- ・収穫作業時に赤かび病被害粒が確認されたほ場は、健全粒に混入しないよう必ず刈り分けを行う。

表1 赤かび病に登録のある主な薬剤（平成23年6月2日現在）

グループ名	薬剤名	作物名	希釈倍数 (散布液量)	使用時期 収穫前日数/使用回数
DMI剤 (EBI剤)	チルト乳剤25	小麦	1,000～2,000倍 (60～150L/10a)	3日前まで/3回以内
	シルバキュアフロアブル	小麦	2,000倍 (60～150L/10a)	7日前まで/2回以内
	ワークアップフロアブル	小麦	2,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/2回以内
QoI剤 (ストロビルリン系)	ストロビーフロアブル	小麦	2,000～3,000倍 (60～150L/10a)	14日前まで/3回以内

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問い合わせ下さい。

028 - 626 - 3086

カスミカメ類（小型の斑点米カメムシ類）が 平年より広範囲で発生しています！

6月末のイネ科雑草地すくい取り調査では、斑点米カメムシ類成虫の頭数は少～平年並でした。一方、発生地点率はやや少～やや多で、カスミカメ類の発生地点率が高く（表1）、中でもアカスジカスミカメは平成15年の調査開始以降最も高い地点率となっています。

7～9月の平均気温は平年並または高いと予想されているため、斑点米カメムシ類の発生量は今後多くなるものと予想されます。

水田周辺等の雑草管理を徹底するとともに、発生状況に応じて適切な薬剤防除を行いましょう。

表1 イネ科雑草地における斑点米カメムシ類成虫の発生状況

分類	発生地点率（％）			頭数（頭）		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
クモヘリカメムシ	31.1	57.4	36.7	1.0	32.9	2.1
ホソハリカメムシ	66.7	61.5	49.0	1.9	2.6	1.1
アカヒゲホソミドリカスミカメ	88.9	78.7	89.8	9.5	27.2	9.6
アカスジカスミカメ	77.8	52.3	69.4	12.0	8.8	9.7

本年は6月27～29日に45地点で20回振りすくい取り調査を実施

平年値は平成13～22年の平均値（うち13～17年は7月中旬調査実施）

アカスジカスミカメの平均値は平成15～22年

防除対策

出穂期10日前までの対策

- ・ 水田内にイネ科雑草（ヒエ等）の子実やホタルイの小穂が発生すると、斑点米カメムシ類を水田へ誘引するため、できるだけ早めの除草に努めましょう。
- ・ 水田周辺の斑点米カメムシ類の生息密度を下げるため、地域全体で畦畔及び水田周辺の雑草地の草刈りを行いましょう。
なお、出穂期直前の草刈りは、斑点米カメムシ類を水田へ追い込み、被害を増大させる恐れがあるため、出穂期10日前までに草刈りを済ませましょう。

出穂期以降の対策

- ・ 穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期（出穂期7～10日後）までに防除しましょう。
望ましい散布時期は、液剤は乳熟初期、粒剤は出穂期～7日後までです。
- ・ その後もカメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回の追加散布を行いましょう。

表2 水稻のカメムシ類に登録のある主な薬剤（平成23年7月1日現在）

薬剤名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 / 使用回数
スタークル1キロH粒剤 （スタークルメイト1キロH粒剤）	1kg / 10a	収穫 7日前まで / 3回以内
ダントツ粒剤	3～4kg / 10a	収穫 7日前まで / 3回以内
スタークル液剤10 （スタークルメイト液剤10）	1000倍	収穫 7日前まで / 3回以内
MR・ジョーカーEW	2000倍	収穫 14日前まで / 2回以内
キラップフロアブル	1000～2000倍	収穫 14日前まで / 2回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫 21日前まで / 2回以内
トレボンEW	1000倍	収穫 21日前まで / 3回以内

詳しくは農業環境指導センター（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>）までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒状況と発生量について

5月下旬から6月上旬に麦類ほ場から採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫を検定した結果、保毒虫率は県内平均で2.3%でしたが、県南部を中心に保毒虫率がやや高い地域が認められました（表1・図1）。

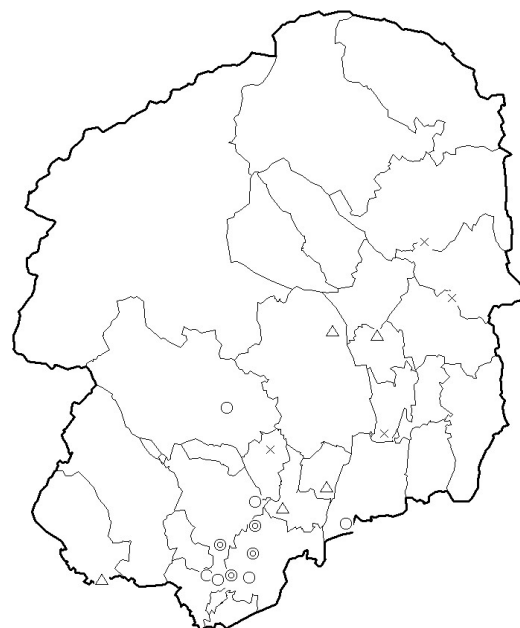
また、ヒメトビウンカ第一世代成虫の本田飛び込み盛期は6月中旬頃と推定され、6月下旬の成虫数は過去平均（昭和62年～平成8年）に比べて多い状況です（表2）。

本年は、6月20日に県南部で前期発病のゆうれい症状(写真1)を確認しています。ヒメトビウンカの発生量が多いことから、保毒虫率が高い地域では縞葉枯病の増加が懸念されます。

穂ぞろい期以降、後期発病の穂の出すくみ等(写真2)を含む縞葉枯病発生株率が10%を超える場合は、次年度の対策が必要となります。ほ場をよく観察し今後の発生状況に注意しましょう。

表1 ヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫検定結果

地点名		麦種	保毒虫率(%)
県北	大田原市蛭畑	二条	0.0
	那須烏山市大桶	六条	0.0
	高根沢町花岡	二条	0.9
県央	芳賀町西高橋	小麦	0.0
	真岡市青田	小麦	1.8
	宇都宮市芦沼	小麦	0.9
	上三川町上三川	二条	0.9
	鹿沼市酒野谷	六条	1.8
県南	下野市小金井	二条	0.9
	小山市下石塚	二条	5.5
	小山市小袋	小麦	5.5
	小山市石ノ上	二条	2.7
	小山市寒川	二条	9.1
	壬生町助谷	六条	0.0
	栃木市惣社町	二条	1.8
	栃木市大平町真弓	二条	5.8
	栃木市藤岡町富吉	二条	1.8
	栃木市藤岡町蛭沼	小麦	3.6
	足利市高松町	小麦	0.9
平均			2.3



国土地理院承認平14総複第149号

保毒虫率(%)	0	0.1~0.9	1~4.9	5~9.9	10以上
記号	x	△	○	◎	●

図1 イネ縞葉枯病ウイルス保毒状況
(ヒメトビウンカ第一世代幼虫)

※5月下旬～6月上旬に麦類ほ場からヒメトビウンカ第一世代幼虫を採集し、エライザ法により検定。検定頭数は各ほ場110頭。

※小山市寒川と栃木市大平町真弓の保毒虫率は2～3ほ場の平均値。

表2 本田におけるヒメトビウンカすくい取り調査結果

調査地点		ヒメトビウンカ			
		成虫			
		6/3	6/10	6/20	
県 央	真岡市青田	H23	0.0	0.0	14.5
		H22	0.0	1.0	2.0
		H21	0.0	2.3	0.0
				[9.6]	
	鹿沼市酒野谷	H23	0.5	6.5	18.5
		H22	0.0	0.5	1.0
H21		—	—	—	
			[13.8]		
県 南	下野市小金井	H23	4.0	8.0	23.0
		H22	0.0	0.0	4.5
		H21	—	5.0	1.7
				[6.3]	
	小山市下石塚 (前年石ノ上)	H23	25.5	10.0	11.0
		H22	0.3	16.0	6.5
		H21	—	—	—
				[4.2]	
	栃木市藤岡町富吉	H23	3.0	26.0	34.0
H22		0.0	22.5	37.5	
H21		5.5	85.0	2.7	
			[10.3]		

*各地点1～3ほ場すくい取り調査(20回振り)平均虫数。
 平成21年は6/1、6/10、6/22調査、22年は5/28、6/10、6/21調査。
 * []: 昭和62年～平成8年平均虫数。6月17～28日調査。
 * -: 未調査



写真1 前期発病 ゆうれい症状



写真2 後期発病 穂の出すくみ等

【防除対策】

- 再生稲はヒメトビウンカの増加や、再生稲での発病株を吸汁して保毒虫率を高めるため、秋耕はすみやかに行う。畦畔等の雑草地でも越冬するため、ほ場周辺の除草を徹底する。
- 縞葉枯病抵抗性品種「あさひの夢」の作付割合を増やす。
- 罹病性品種（コシヒカリ、なすひかり等）を作付する場合は、ダントツ箱粒剤[ウンカ類]、アドマイヤー箱粒剤[ウンカ類]、またはこれらを含む混合箱施用剤を使用する。

※プリンス粒剤は、ヒメトビウンカの感受性が低下している地域があるため、保毒虫率が高い地域では罹病性品種への使用を避けてください。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

また当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用ください。

（TEL 028-626-3086）

県中北部でフタオビコヤガ幼虫の発生が多く、 今後、被害（葉の食害）の拡大が懸念されます！

7月中旬の本田すくい取り調査では、フタオビコヤガ幼虫（第2世代）の発生頭数は平年よりやや多い状況です（表1）。特に、県中北部の早植水稻で多く、広範囲に発生しています（図1）。

さらに今後、多肥で過繁茂のほ場、普通植水稻、飼料イネ等では、第3世代幼虫の発生が増えるおそれがあります。

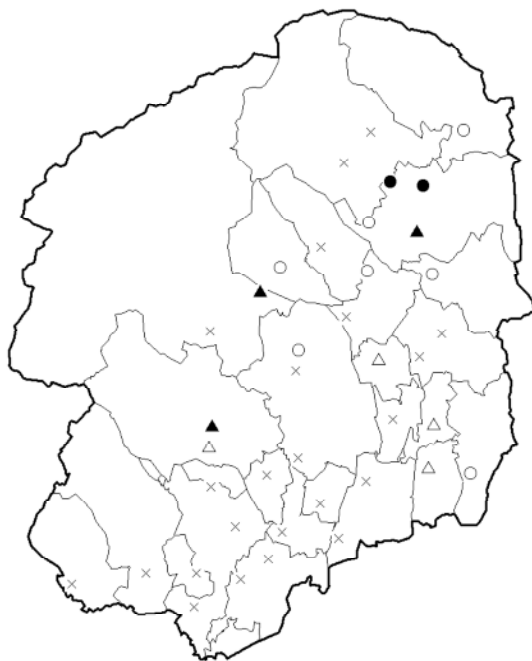
老齢幼虫になると、食害も急に増えるため注意が必要です。

表1 フタオビコヤガ幼虫の発生状況
（7月中旬）

	発生ほ場率（%）			発生概評
	本年	平年	昨年	
県全体	41.0	26.7	47.5	やや多い
県北部	60.0	25.7	53.3	多い
県中部	46.7	25.5	46.7	多い
県南部	0.0	29.8	40.0	少ない

39ほ場、すくい取り調査（20回振り）

平年値：平成13年～22年の平均値



頭数（頭）	0	1	2~4	5~10	11以上
記号		x			

すくい取り（20回振り）



図1 フタオビコヤガ幼虫の地点別発生状況
防除対策

本田における対策

- ・ 発生・食害状況を確認し、発生初期に薬剤防除（表2）を行いましょう。

常発地における次年度以降の対策

- ・ フタオビコヤガに適用のある箱施用剤を使用しましよう。

表2 フタオビコヤガに登録のある主な薬剤（平成23年7月19日現在）

薬剤名	希釈倍数又は使用量	使用時期 / 使用回数
トレボン粉剤DL	3 kg / 10a	収穫 7日前まで / 3回以内
MR・ジョーカーEW	2000倍	収穫 14日前まで / 2回以内
スミチオン乳剤	2000～4000倍	収穫 21日前まで / 2回以内

図2 フタオビコヤガ幼虫

詳しくは農業環境指導センター（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>）までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

ハスモンヨトウ成虫が多く発生しています！

当センターが実施するフェロモントラップによるハスモンヨトウ成虫の発生量調査で、7月下旬から誘殺数が大きく増加している。調査を実施している県内6地点中4地点で7月第5半旬の誘殺数が過去10年（栃木市は調査8年目）で最多となった。特に、大田原市では平年値の12.9倍、宇都宮市では同26倍であった。

今後、成虫が大豆や野菜類、花き類に産卵し、孵化した幼虫による食害が懸念されるため、圃場をよく観察して対策を取ることが重要である。卵は卵塊として産卵され、表面は薄茶色の毛に覆われている（写真1）。孵化した幼虫は集団で食害し、やがて分散する（写真2、写真3）。野菜類・花き類とも育苗期間や定植直後に加害されると被害が大きい。幼虫は成長すると被害が大きく、薬剤が効きにくくなり防除が困難になる。

【防除対策】

- ・ 定期的な圃場の観察によって早期発見に努め、発生を確認した場合には卵塊や分散前の幼虫は寄生葉とともに摘み取り処分する。
- ・ 発生が見られた場合、薬剤を葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- ・ 施設栽培では成虫の侵入防止のため開口部に防虫ネット等を張る（4～5mm目のネットが有効とされる）。また、施設のパイプ等の資材に産卵することもあるため注意して観察し、卵塊を発見した場合には潰して除去する。
- ・ ほ場周辺の雑草は発生源になるため、雑草管理を徹底する。

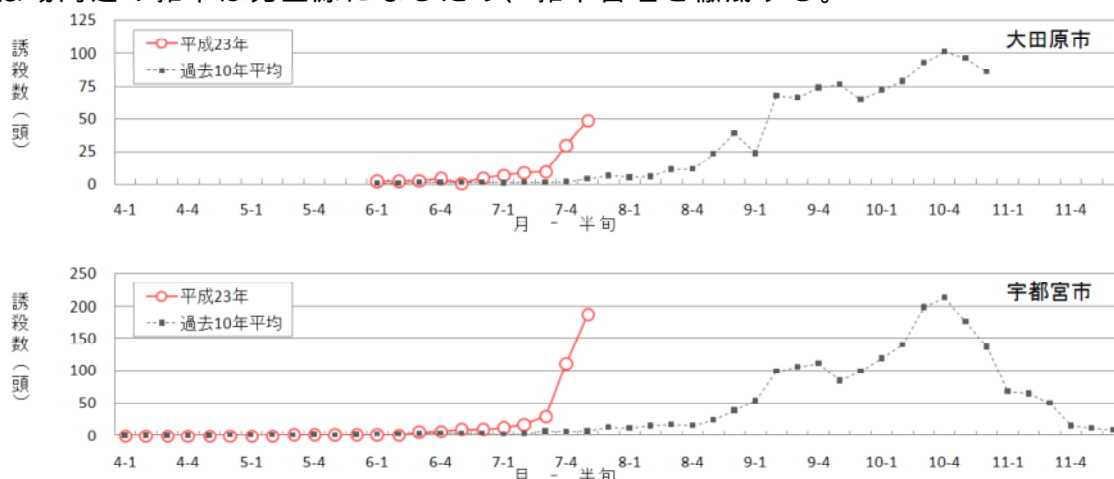


図1 ハスモンヨトウ成虫のフェロモントラップ誘殺数



写真1 いちご葉裏の卵塊 写真2 大豆の若齢幼虫 写真3 いちごの中齢幼虫

当センターホームページにハスモンヨトウ3齢幼虫の薬剤感受性検定結果を掲載中。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

また、当センター携帯サイト（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。

（ 028 - 626 - 3086 ）

斑点米発生が懸念されます！

斑点米カメムシ類の発生密度が極めて高いイネ科雑草地があります

7月中旬のイネ科雑草地における斑点米カメムシ類発生量(県内19地点平均)は、すべての種類で平年値を上回り、地点によってはクモヘリカメムシは600頭以上、アカヒゲホソミドリカスミカメは300頭以上、アカスジカスミカメは1000頭以上(20回すくい取り)の地点もあります。特に、アカスジカスミカメの平均頭数は平年の7倍以上多く、6月下旬調査時に比べても急増しています(表1)。なお、カスミカメ類は調査19地点すべてで発生が見られました。

8月以降の平均気温は平年並~高いと予想され、斑点米カメムシ類の発生に好適な気象が続きます。特に、水稻に割れ穂が発生している場合は、登熟期後半にカスミカメ類による吸汁が容易になり、斑点米の被害が拡大します。

水稻の生育状況、斑点米カメムシ類発生状況に応じた適切な防除を行いましょ。う。

表1 イネ科雑草地における斑点米カメムシ類成虫の発生状況

分類	発生地点率(%)			頭数(頭)			発生概評
	7月中旬		6月下旬	7月中旬		6月下旬	
	本年	平年	本年	本年	平年	本年	
クモヘリカメムシ	63.2	65.2	31.1	79.6	41.7	1.0	やや多い
ホソハリカメムシ	89.5	68.9	66.7	4.4	2.9	1.9	平年並
アカヒゲホソミドリカスミカメ	100.0	80.3	88.9	55.5	27.8	9.7	多い
アカスジカスミカメ	100.0	62.1	77.8	154.5	21.7	12.3	多い

7月中旬:7月12-14日19地点(6月下旬:6月27-29日45地点)で20回振りすくい取り調査を実施
平年値:平成13年-22年の平均値(アカスジカスミカメの平均値は平成15-22年)

防除対策

- ・ 穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期(出穂期7~10日後)までに防除しましょう。
- ・ その後もカメムシ類が見られる場合は、7~10日間隔で1~2回の追加防除を行いましょ。う。



アカヒゲホソミドリ アカスジカスミカメ
カスミカメ

表2 水稻のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成23年7月28日現在)

薬剤名	希釈倍数又は使用量	使用時期/使用回数
スタークル液剤10 (スタークルメイト液剤10)	1000倍	収穫 7日前まで/3回以内
MR・ジョーカーEW	2000倍	収穫 14日前まで/2回以内
クラブフロアブル	1000~2000倍	収穫 14日前まで/2回以内
スミチオン乳剤	1000倍	収穫 21日前まで/2回以内
トレボンEW	1000倍	収穫 21日前まで/3回以内

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

山沿いの水田を中心に 斑点米カメムシ類が平年より多く飛来しています！

8月1～3日の水田におけるすくい取り調査(県内39地点平均)では、斑点米カメムシ類の発生は平年より多い～やや多い状況です。

成虫のすくい取り頭数はすべての種類で平年値を上回り(表1)、幼虫の発生も見られています。県北・県央の山沿いではクモヘリカメムシの飛来が見られ、アカスジカスミカメが100頭以上となった地点もあります。

斑点米はクモヘリカメムシでは成虫だけでなく幼虫も発生原因となります。また、水稻に割れ物が発生している場合は、登熟期後半にカスミカメ類による吸汁が容易になり、斑点米の被害が拡大します。

8月中旬以降の平均気温は平年並～高いと予想され、斑点米カメムシ類の発生に好適な気象が続きます。下記のとおり、発生状況に応じた適切な防除を行いましょ。



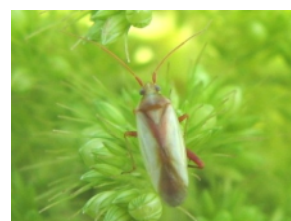
クモヘリカメムシ
体長16mm



ホソハリカメムシ
体長9～11mm



アカヒゲホソミドリ
カスミカメ 体長6mm



アカスジカスミカメ
体長5～7mm

表1 水田における斑点米カメムシ類成虫の発生状況

分類	発生ほ場率(%)		頭数(頭)		発生概評
	本年	平年	本年	平年	
クモヘリカメムシ	10.3	5.7	0.3	0.2	多い
ホソハリカメムシ	7.7	1.6	0.1	0.0	やや多い
アカヒゲホソミドリカスミカメ	7.7	5.8	0.4	0.2	やや多い
アカスジカスミカメ	7.7	9.4	2.7	0.3	やや多い

8月1-3日 39ほ場で20回振りすくい取り調査を実施

平年値:平成14年-22年の平均値(アカスジカスミカメの平均値は平成18-22年)

防除対策

- 斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は、使用時期(収穫前日数)等に十分注意して薬剤を散布する。

表2 水稻のカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成23年8月9日現在)

薬剤名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
スタークル液剤10 (スタークルメイト液剤10)	1000倍	収穫 7日前まで / 3回以内	ジノテフラン / 3回以内(本田)
MR・ジョーカーEW	2000倍	収穫 14日前まで / 2回以内	シラフルオフエン / 2回以内
キラップフロアブル	1000～2000 倍	収穫 14日前まで / 2回以内	エチプロール / 2回以内

詳しくは農業環境指導センター(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

大豆におけるハスモンヨトウの動向に注意しましょう！

今年は平年よりハスモンヨトウの発生が早い傾向です。

ハスモンヨトウ成虫は、県内6地点のフェロモントラップの大半の地点において、平年より早い7月下旬頃に多数誘殺されています(植物防疫ニュース速報No.7参照)。

8月15～16日の大豆ほ場における見取り調査(県内15地点平均)では、ハスモンヨトウの発生ほ場率は平年より高く(47%、平年17%)、県南から県北まで若齢～中齢幼虫の発生が見受けられます(図1、写真1～4)。

今後の平均気温は高く降水量は平年並と予想され、発生の阻害要因が小さいため、今後増加する懸念があります。下記のとおり、早期に適切な防除を行うとともに、今後の発生の動向に十分留意しましょう。

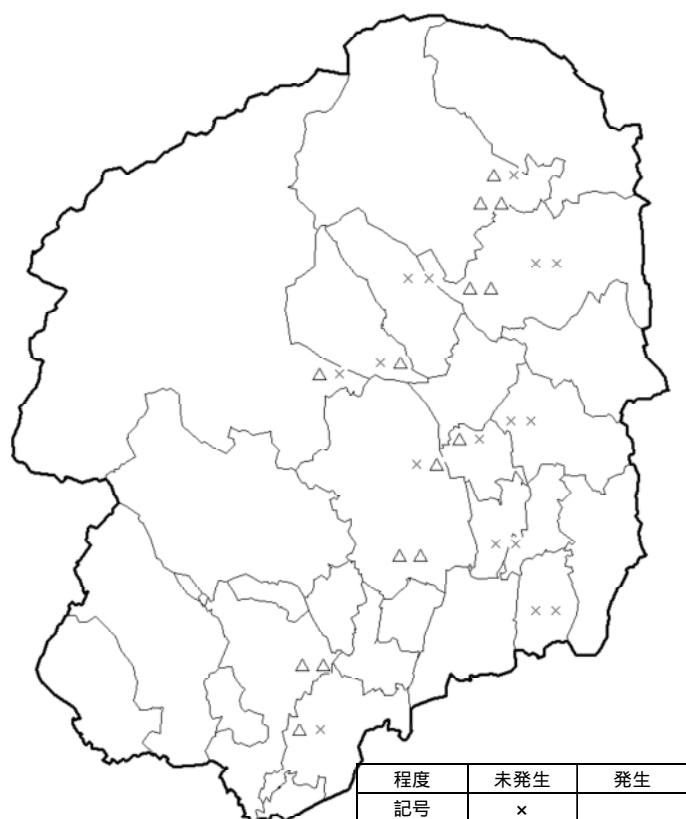


図1 ハスモンヨトウの地点別発生状況



写真1 ふ化直後幼虫



写真2 若齢幼虫の集団



写真3 白変葉



写真4 中齢幼虫

防除対策

- ・ 幼虫が集団でいるうちに、葉ごと摘み取り処分する。
- ・ 幼虫の齢期が進むと防除効果が低下するので、若齢幼虫が集団でいるうちに下記を参考に薬剤防除する。薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤は連用しない。

大豆のハスモンヨトウに登録のある主な薬剤（平成23年8月16日現在）

表1 発生初期(若齢幼虫中心)の場合

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
IGR系			
マトリックフロアブル	2000～3000倍	収穫前日まで / 3回以内	クロマフェノジド / 3回以内
カスケード乳剤	4000倍	収穫7日前まで / 2回以内	フルフェノクスロン / 2回以内
アタプロン乳剤	2000～4000倍	収穫14日前まで / 2回以内	クロルフルアズロン / 2回以内
ノーモルト乳剤	2000倍	収穫14日前まで / 2回以内	テフルベンズロン / 2回以内
BT剤			
ゼンターリ顆粒水和剤 <豆類(種実)>	1000倍	発生初期 但し、収穫前日 まで / -	BT / -
フローバックDF	1000倍	発生初期 但し、収穫前日 まで / -	BT / -
合成ピレスロイド系			
トレボンEW	1000倍	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トレボン粉剤DL <豆類(種実)>	4kg/10a	収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内

表2 多発時(若齢～老齢幼虫)の場合

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
その他			
トルネードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで / 2回以内	インドキサカルブMP / 2回以内
フェニックス顆粒水和剤	2000倍	収穫7日前まで / 3回以内	フルベンジアミド / 3回以内
プレオフロアブル	1000～2000倍	収穫7日前まで / 2回以内	ピリダリル / 2回以内
プレバソソフロアブル5	4000倍	収穫7日前まで / 3回以内	クロラントラニプロール / 3回以内

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

大豆で再びハスモンヨトウ幼虫の発生が始まっています！

吸実性カメムシ類、紫斑病の発生も懸念されます。

大豆ほ場における前回の見取り調査（8月中旬）では、ハスモンヨトウの発生ほ場率は平年より高い状況でした（植物防疫ニュース速報No.10参照）。9月5～7日の調査でも、ハスモンヨトウの発生ほ場率（県内15地点平均）は依然として平年より高く（表1、図1）、特に若齢幼虫（写真1）は半分以上のほ場で発生しており、今後もハスモンヨトウ幼虫による加害が懸念されます。

また、吸実性カメムシ類（写真2（1）～（3））の発生ほ場率もやや高く（成虫：27%、平年15%）注意が必要です。開花期以降の天候不順から子実の紫斑病（写真3）の発生も懸念されます。適切な時期に防除を行いましょう。

表1 大豆におけるハスモンヨトウの発生状況

分 類	発生ほ場率(%)		頭数(頭/25株)		発生概評
	本 年	平 年	本 年	平 年	
ハスモンヨトウ発生ほ場	83.3	43.6	-	-	多い
白変葉(株数)	50.0	15.9	0.3	0.1	多い
若齢幼虫	53.3	18.1	27.1	2.0	多い
中齢幼虫	40.0	25.1	2.2	1.7	やや多い
老齢幼虫	26.7	15.8	0.2	0.7	平年並

9月5-7日 15地点30ほ場で見取り調査を実施
平年値:平成13年-22年の平均値

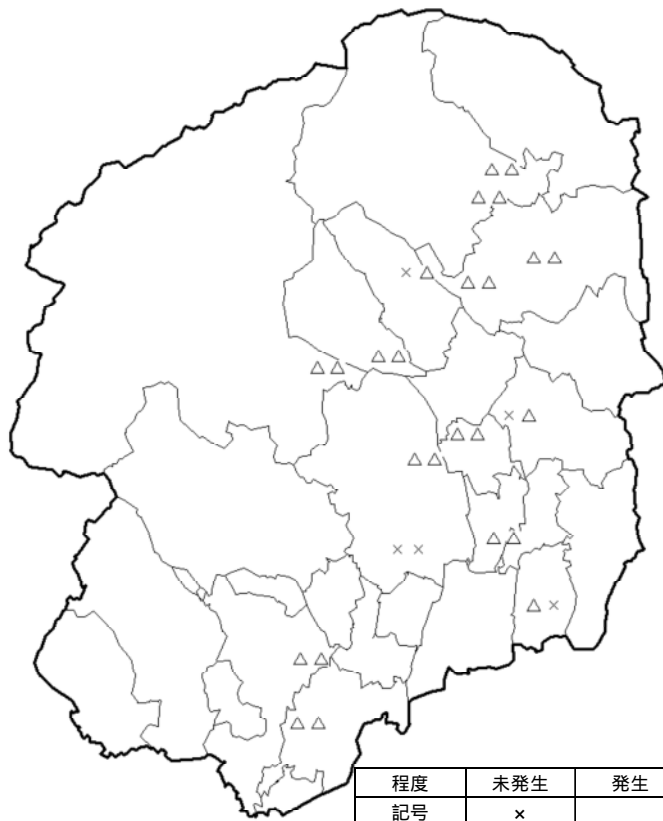
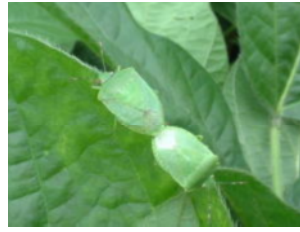


写真1 若齢幼虫

図1 ハスモンヨトウ地点別発生状況(9月上旬)



(1)ホソヘリカメムシ (2)イチモンジカメムシ (3)アオクサカメムシ
写真2 吸実性カメムシ類

写真3 紫斑病
(子実)

大豆の病害虫に登録のある主な薬剤（平成23年9月9日現在）

農薬名 (使用方法: 散布)	病害虫名						使用時期 / 本剤の使用回数	成分 / 成分の総使用回数
	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	カ メ ム シ 類	マ メ シ ン ク イ ガ	ダ シ ラ メ イ チ ガ ジ マ	ム シ タ ス ジ ヒ メ ハ	紫 斑 病		
トレボンEW							収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トレボン乳剤							収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内
トルネードフロアブル							収穫7日前まで / 2回以内	インドキサカルブMP / 2回以内
フェニックス顆粒水和剤							収穫7日前まで / 3回以内	フルベンジアミド / 3回以内
プレオフロアブル							収穫7日前まで / 2回以内	ピリダリル / 2回以内
プレバソンフロアブル5							収穫7日前まで / 3回以内	クロラントラニプロール / 3回以内
キラップフロアブル							収穫7日前まで / 2回以内	エチプロール / 2回以内
スタークル液剤10 (スタークルメイト液剤10)							収穫7日前まで / 2回以内	ジノテフラン / 2回以内
スミチオン乳剤							収穫21日前まで / 4回以内	MEP / 4回以内
ダントツフロアブル							収穫7日前まで / 3回以内	クロチアニジン / 3回以内
アミスタートレボンSE							収穫14日前まで / 2回以内	エトフェンプロックス / 2回以内 アゾキシストロピン / 2回以内
アミスター20フロアブル							収穫7日前まで / 2回以内	アゾキシストロピン / 2回以内
ベルコートフロアブル							収穫7日前まで / 4回以内	イミノクタジン / 4回以内
ゲッター水和剤							収穫14日前まで / 3回以内	ジエトフェンカルブ / 3回以内 チオファネートメチル / 4回以内
サンリット水和剤							収穫14日前まで / 2回以内	シメコナゾール / 2回以内

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

県南の一部でイネ縞葉枯病が多発しています！

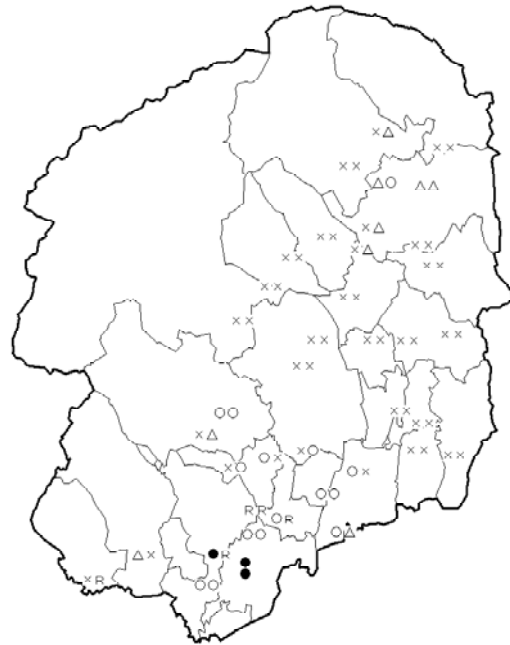
8月下旬～9月上旬調査におけるイネ縞葉枯病の発生は、平年値に比べ発生ほ場率は並ですが、発病株率は多い状況でした（表1）。本年は、県南の一部で要防除水準（黄熟期の発病株率10%）を超えるほ場が見られました（図1）。中には発病株率が80%を超えるほ場もあり、減収も予想されます。

本年の発病株率が多い要因は、ヒメトビウンカ第一世代幼虫の保毒率が県南の一部で高かったことや成虫の本田への飛び込み数が多かったこと（植物防疫ニュースNo. 5）、その後の虫の個体数も多かったこと（8月上旬ウンカ類幼虫数平年比739%）等が考えられます。また、多発ほ場では適切な防除が行われなかったこと（箱施用剤の不使用や適切な剤を選択しない等）も、発生を助長したと考えられます。

黄熟期の発病株率が10%を超えるほ場が見られる地域では、縞葉枯病の防除が必要です。次年度に向けて適切な防除対策をとりましょう。

表1 イネ縞葉枯病調査結果

県全体発生ほ場率(A)(%)	35.9
平年値(B)(%)	26.7
(A)／(B)×100	134.5
発生程度	平年並
県全体発病株率(A)(%)	3.0
平年値(B)(%)	1.6
(A)／(B)×100	184.1
発生程度	多
県北部発病株率(A)(%)	0.1
平年値(B)(%)	0.0
(A)／(B)×100	360.0
発生程度	多
県中部発病株率(A)(%)	0.8
平年値(B)(%)	1.3
(A)／(B)×100	58.9
発生程度	やや少
県南部発病率株(A)(%)	11.6
平年値(B)(%)	5.2
(A)／(B)×100	221.4
発生程度	多
概評	やや多



国土地理院承認平14総検第149号

程度	無	散見	少	中・多・甚	
発病株率(%)	0	1未満	1～10	11～20	21以上
記号	x	△	○	▲	●

R：抵抗性品種の作付ほ場

図1 県内各地点の発生状況

- ※ 調査日：8月22～24日・9月7～8日
- ※ 調査ほ場数78 1ほ場300株調査
- ※ 平年値：H20年～H22年の3カ年平均

【防除対策】

- 再生稲や畦畔等の雑草地はヒメトビウンカの越冬場所となるため、速やかな秋耕や除草により越冬場所を減らし、密度を下げる。
- 縞葉枯病抵抗性品種「あさひの夢」の作付割合を増やす。
- 罹病性品種（コシヒカリ、なすひかり等）を作付する場合は、ダントツ箱粒剤、アドマイヤー箱粒剤またはこれらを含む混合箱施用剤を使用する。
- ※ プリンス粒剤は、ヒメトビウンカの感受性が低下している地域があるため、罹病性品種への使用を避ける。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>）までお問い合わせ下さい。

TEL 028-626-3086

コムギ縞萎縮病の防除対策

コムギ縞萎縮病(WYMV)は、平成20年以降、タマイズミや農林61号作付ほ場で発生が多く見られるようになりましたが、本年4月の調査では発生ほ場率は23.3%で、河内郡・芳賀郡で発病程度の高いほ場が多く見られました(表1)。農林61号やタマイズミを作付する場合、防除対策をしっかりと行う必要があります。

また、縞萎縮病に強いイワイノダイチも実害はほとんどない程度ですが発病が確認され、縞萎縮病とムギ類萎縮病(SbWMV)が混在するほ場も確認されました(図1)。両ウイルスが多いほ場は黄化と萎縮が激しく見られました。

コムギ縞萎縮病は土壌伝染性のウイルス病です。発病後に有効な防除法がないことから、は種前の対策が重要になります。発生が見られる地域では平成24年産作付に向けて対策をとりましょう。

表1 コムギ縞萎縮病調査結果(H23年4月)

コムギ縞萎縮病(H23年)		発生ほ場率(%)		備考			
		23.3		調査ほ場数: 459			
郡名	場所	調査ほ場数	発生ほ場率(%)	程度別発生ほ場率(%)			
				少	中	多	甚
塩谷	さくら市押上	20	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	芳賀町下延生~上延生	44	9.1	4.5	4.5	0.0	0.0
芳賀	芳賀町西高橋~東高橋	40	7.5	5.0	2.5	0.0	0.0
	真岡市田島~京泉~飯貝	31	19.4	6.5	0.0	0.0	12.9
	益子町山本~前沢	57	40.4	12.3	8.8	12.3	7.0
	益子町北中	38	60.5	34.2	5.3	15.8	5.3
河内	宇都宮市下田原町~古田町~相野沢	30	30.0	3.3	3.3	10.0	13.3
	宇都宮市芦沼町	22	36.4	0.0	9.1	22.7	4.5
	宇都宮市逆面町~金田町	14	42.9	14.3	0.0	7.1	21.4
	宇都宮市下砥上町	21	52.4	14.3	9.5	28.6	0.0
	宇都宮市下荒針町	11	81.8	45.5	18.2	18.2	0.0
下都賀	小山市小袋~鏡~中里	20	5.0	0.0	0.0	5.0	0.0
	小山市寒川	15	6.7	0.0	0.0	0.0	6.7
	小山市追間田	29	10.3	3.4	0.0	3.4	3.4
安足	足利市小曾根町~高松町	67	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
県全体合計/平均		459	23.3	8.3	3.7	7.0	4.4

発病程度
(発病面積率)
少: 1 ~ 10%
中: 11 ~ 30%
多: 26 ~ 50%
甚: 51%以上

コムギ縞萎縮病とムギ類萎縮病の麦種による発病の有無

病名	病原ウイルス	感染・発病の有無 ¹⁾	
		小麦	大麦
コムギ縞萎縮病	Wheat yellow mosaic virus	+	-
オオムギ縞萎縮病	Barley yellow mosaic virus	-	+
ムギ類萎縮病	Soil-borne wheat mosaic virus	+	+ ²⁾

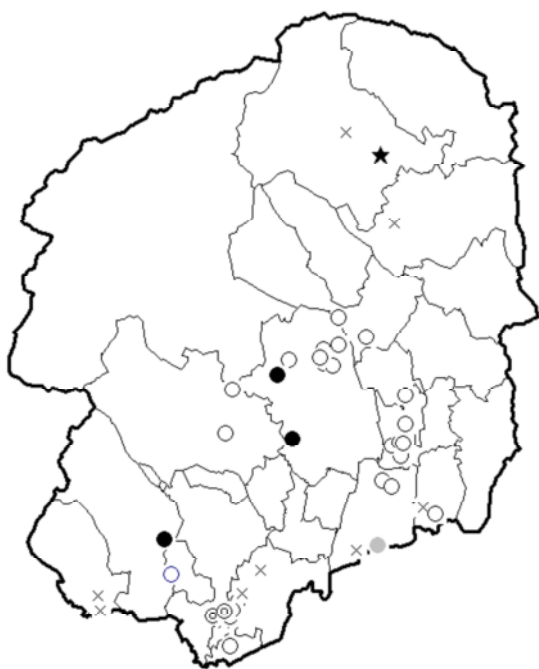
注1) +: 感染・発病する, -: 感染・発病しない

2) 過去の報告(小川, 1988)では、二条大麦は発病しない品種が多いとされている。

現在の品種では、サチホ・スカイゴールデンは抵抗性、とちのいぶきは罹病性。六条大麦のシュンライは罹病性。



写真1 コムギ縞萎縮病



国土地理院承認平14総視第149号

コムギ縞萎縮病(タイズミ・農林61号)	
コムギ縞萎縮病(ワイノダイチ)	
ムギ類萎縮病(農林61号)	
コムギ縞萎縮病・ムギ類萎縮病混発	
オオムギ縞萎縮病・ムギ類萎縮病混発	

写真2 コムギ縞萎縮病発病ほ場

ウイルス検定: ELISA法

検定機関: 九州沖縄農業研究センター(H20)

東京大学アジア生物資源環境研究センター(H21)、中央農業研究センター(H22,23)
は六条大麦でのオオムギ縞萎縮病とムギ類萎縮病の混発事例(参考)

図1 コムギ縞萎縮病ウイルス確認地点

【防除対策】

- 1) 被害の大きい発病ほ場は休耕する。
- 2) コムギ縞萎縮病が発生しているほ場は、大麦またはワイノダイチ・ゆめかおり・さとのそらに作付転換する。
- 3) やむを得ずタイズミや農林61号を作付する場合は、次の対策をとる。
 湿害は発生を助長するため、排水対策を十分行う。
 播種適期内の遅めの時期に播種する。晩播すると穂数が減少して減収するので播種量を増やす。タイズミの場合は施肥量も増やす。
 土壌感染を防止するため、トラクターなどの作業は、ほ場に入る順番を考慮し、発病ほ場を最後にする。また、作業後は機械に付着した土を洗い流す。

詳しくは、農業環境指導センター(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>)までお問い合わせください。

028 - 626 - 3086

いちごのハダニ類の多発生に注意しましょう！

当センターの10月のいちご本ほ巡回調査の結果、ハダニ類が平年と比較して多発生していました（平年比：ほ場率：302.4%、株率：281.6%、当センターいちご病害虫情報第5号参照）（図1）。

気象予報では、今後一カ月の気温は高いと予想されており、さらにいちごハウス内はマルチ後に乾燥状態となるためハダニ類の増殖に好適です。今後は、生育に伴い葉数の増加や茎葉の繁茂により葉液がかかりにくくなり、さらにミツバチの導入や果実の収穫などが始まり薬剤散布しにくい時期となります。薬剤散布の効果が高い時期に防除を行いましょう。

【防除対策】

ハダニ類を見つけるためのポイント

- ・ 発生初期は特に下位葉で見られるため、葉裏をルーペ等でよく観察する。
- ・ 地表面と接した下位葉の裏側は薬剤がかかりにくく、ハダニ類が生き残り易い。特に、薬剤散布後は注意してハダニ類を探し、先端の細いもので軽くつついて生死を確認する。
- ・ 薬散後しばらくは、新葉の表面に新しい食害痕ができていないか注意する。カスリ状に色が抜けた食害痕があれば、発生が継続している可能性が高い。

防除のポイント

- ・ 発生初期には気門封鎖系薬剤をスポット散布して拡大を防ぐ。
- ・ 葉かき後の薬散は葉裏に薬剤がかかり易くなるため効果的である。
- ・ 株が大きくなり薬剤がかかりにくくなる前に防除する。
- ・ スパイカルEX、スパイデックスなど天敵導入時には事前に薬剤散布を行いハダニ類の密度を下げる。薬剤は表1の天敵への影響を参考として選択する。
- ・ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・ 当センターホームページに掲載中のいちごのハダニ類の薬剤感受性試験結果を参考にする。
- ・ ハダニ類発生ハウスからのハダニ類持ち込みを防ぐため、管理作業は未発生ハウスから行う。



写真1 高密度で発生したハダニ類

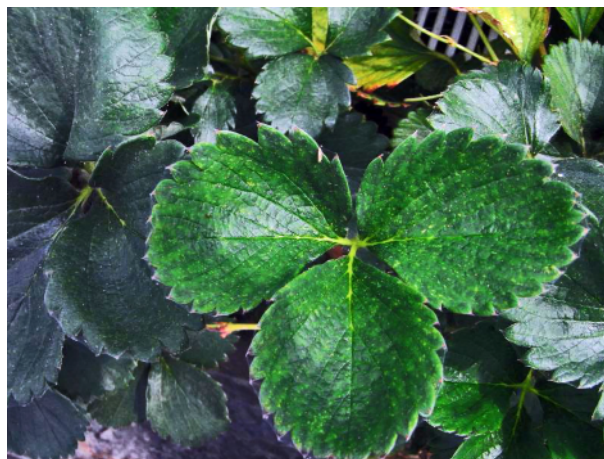


写真2 ハダニ類による葉のカスリ症状

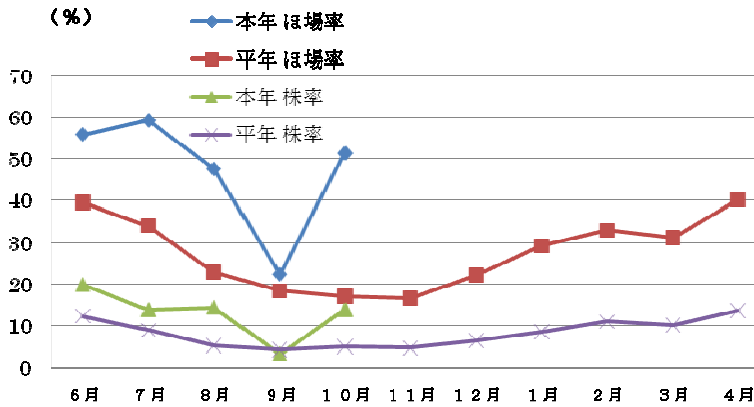


図1 ハダニ類発生ほ場率・株率

表1 いちごのハダニ類に登録のある主要な薬剤（平成23年10月20日現在）

薬剤名	使用時期・回数	ミツバチへの影響の目安	天敵スパイカルEX(ミヤコカブリダニ)・スパイデックス(チリカブリダニ)への影響
ダニサラパフロアブル	収穫前日まで・2回以内	1日	使用可
マイトコーネフロアブル	収穫前日まで・2回以内	1日	使用可
テデオン乳剤	収穫3日前まで・2回以内	影響なし	使用可
コロマイト水和剤	収穫前日まで・2回以内	1日	使用は天敵導入2週間前まで
スターマイトフロアブル	収穫前日まで・2回以内	1日	使用可
アフーム乳剤	収穫前日まで・2回以内	2日	使用は天敵導入2週間前まで
気門封鎖系			
粘着くん液剤	収穫前日まで・制限なし	1日	使用可だが多少影響あり
エコピタ液剤	収穫前日まで・制限なし	1日	使用可だが多少影響あり
サンクリスタル乳剤	収穫前日まで・制限なし	1日	使用可だが多少影響あり
アカリタッチ乳剤	収穫前日まで・制限なし	-	使用可だが多少影響あり

薬剤の天敵への影響に関する資料はアリスライフサイエンス社提供。

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。
 また、当センター携帯サイト（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>）もご利用下さい。
 （ 0 2 8 - 6 2 6 - 3 0 8 6 ）

ニラ白斑葉枯病の発生が多くなっています！

11月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は33.3%（平成14.4%）、発病株率は3.9%で、平年に比べ県内全域で白斑葉枯病の発生ほ場が多くみられました。気象予報によると、向こう1ヶ月は平年に比べ、降水量が多く、日照時間が少ない見込みで、今後の発生増加が予想されます。

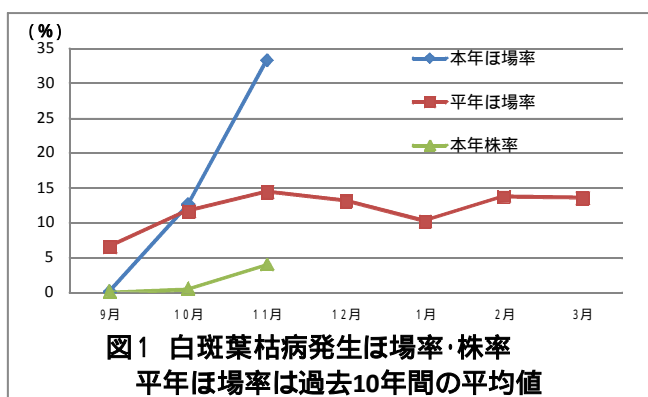


図2 白斑葉枯病の発生状況
発生株率：× 0%、 1～20%、 21～40%
41%以上

【防除対策】

- (1) 換気を充分に行い、ハウス内や通路などを乾燥させるようにする。
- (2) 被害葉は取り除き、畑のまわりに放置しないで、土中深く埋める等適切に処理をする。
- (3) 生育期の発病初期に適用薬剤をていねいに散布する。

表1 ニラ白斑葉枯病に登録のある主な防除薬剤

薬 剤 名	希釈倍数	散布液量	使用方法	使用時期 / 使用回数
ストロビーフロアブル	3,000倍	100～300L/10a	散布	収穫前日まで / 3回以内
セイビアーフロアブル 20	2,000倍	100～300L/10a	散布	収穫7日前まで / 1回
アミスター 20フロアブル	2,000倍	100～300L/10a	散布	収穫14日前まで / 2回以内
ポリオキシンAL水溶剤	1,500倍		散布	収穫14日前まで / 3回以内
トップジンM水和剤	1,000倍	3L/m ²	灌注	収穫21日前まで / 1回

注) 平成23年11月18日現在の農林水産消費安全技術センターの農薬登録情報に基づいて作成しています。

携帯サイトからも「ご意見・ご質問」が送信できるようになりました。
詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。
当センター携帯サイト (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/keitai.htm>) もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012

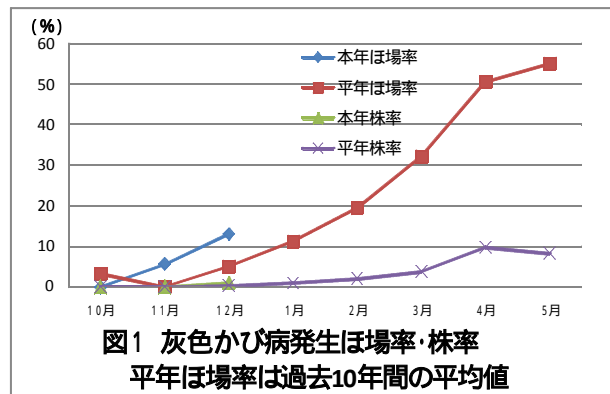
トマト灰色かび病の発生が多くなっています！

12月上中旬の巡回調査の結果、発生ほ場率は13.0%（平年5.0%）、発病株率は0.9%（平年0.2%）で、過去10年間で発生ほ場率は2番目、発病株率は最も高い値です。ここ数年は、年内から灰色かび病が多発し、その後の発生が止まらない傾向にあります。

気象予報によると、向こう1ヶ月は平年に比べ、降水量が平年並～多く、日照時間が少ない～平年並の見込みで、今後の発生増加が予想されます。

表1 越冬・冬春トマトにおける灰色かび病の発生状況

調査時期	発生ほ場率(%)		発生株率(%)	
	本年	平年	本年	平年
10月	0.0	3.3	0.0	0.1
11月	5.6	0.0	0.0	0.0
12月	13.0	5.0	0.9	0.2
1月		11.3		0.9
2月		19.4		2.1
3月		32.2		3.8
4月		50.5		9.7
5月		55.1		8.2



1 防除対策

- (1) 灰色かび病の発生しやすい条件は15～23℃と比較的低温で、多湿条件であるため、ハウス内の温度及び湿度管理に注意する。特に曇雨天日が続く場合は、循環扇、暖房機を稼働し、ハウス内の湿度を下げ、植物体表面の結露を除去する。
- (2) 灰色かび病は腐生性が強いいため、発病果実・葉、枯死葉、花卉等は、すみやかに除去し、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- (3) ボトキラー水和剤を使用する場合は、低温条件下では効果が現れにくいので、10℃以上の温度を確保するよう努める。また、本剤は予防剤であるため、発病後は化学農薬中心の防除に切り替える。
- (4) 曇雨天時は液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効である。
- (5) 同一系統薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。

表2 トマト灰色かび病に登録のある農薬例（平成23年12月12日現在の登録状況）

系統名	薬剤名	希釈倍率等	使用時期 / 使用回数
ベンゾイミダゾール系	ゲッター水和剤	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 5回以内
アザリルリミジン系	フルピカフロアブル	2,000倍～3,000倍	収穫前日まで / 4回以内
抗生物質	ホリオキシAL水溶剤	2,500倍～5,000倍	収穫前日まで / 3回以内
ジカホキシミド系	ロブラールくん煙剤	1	収穫前日まで / 3回以内
その他	カンタストライフアブル	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 3回以内
	セバアーフアブル20	1,000倍～1,500倍	収穫前日まで / 3回以内
	ベルコートフロアブル	2,000倍	収穫前日まで / 3回以内

1 くん煙室容積300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）当たり100g（50g×2個）
トマト灰色かび病の薬剤感受性検定結果については、当センターHPを参照下さい。

詳しくは農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>) までお問い合わせください。
当センター携帯サイト (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>) もご利用ください。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012